

『葉隠』における武士の「自律」と「服従」

－ 『葉隠』思想の特殊と普遍（三）－

The Autonomy and Obedience of Samurai in HAGAKURE

種 村 完 司

TANEMURA Kanji

『葉隠』における武士の「自律」と「服従」

— 『葉隠』思想の特殊と普遍 (二) —

種 村 完 司

キーワード 自律と服従、戦士の武士と文官的武士、「死」と自律、

内面と外面の一致、主君への奉公と藩への忠誠、
主体的意志的服従

一 徳川幕藩体制期の武士の「自律」と「服従」の相克

これまでの論稿で明らかになったように、『葉隠』に登場する侍たちは、個我としての強烈な自覚、武士という身分への尊大なほどのプライドをもつ、社会的な存在であった。彼らには、封建的身分制社会という制約の下ではあれ、確固たる個人主義的意識が横溢している。たしかに近代的市民が備えるようになった自律と異質なものはあるが、しかし、武士には武士独特の「自律」的性格が濃厚であったことが承認されてよい。「我は我なり」という自己同一および自重の精神、「自らの生死はおのれの意志で決める」という自己決定の態度は、武士において最も先鋭的であったからである。

とはいえ、武士のこの自律性は、世の中で戦国時代から織田・豊臣政権期をへて、江戸時代へと移行する中で、社会のしくみや変化の影響をうけて、少しずつ変容していくことを余儀なくされた。すなわち、戦乱の世から泰平の世への流れは、徳川幕藩体制の確立・定着の過程であったのであり、それは、中央集権的な法秩序の整備と適用、近世的官僚制の創設と普及をもたらした。泰平の時代にふさわしいこうした法秩序と官僚制は、戦士ないし闘士であった武士たちに、新たな極

楷を与え、これまでとは異なる難しい服従を強いたのである。

日本各地に存在する武士たちは、もちろん徳川幕府と直接に結びついていたわけではない。戦国期からの主従関係の延長上で、各地の「藩」に所属し、藩から与えられる土地や禄によって生計をたて、臣下としての業務をはたしつづけた。「武家諸法度」をはじめとするさまざまな幕府の掟による武士層の統制は、日本の津々浦々におよんだが、一方で、武士たちを直接的に支配・統御し、権力としての威光を発揮したのは、小さな「国」としての藩であった。武士たちにとって、幕府への恭順はけつして斥けることのできないものだったが、自らが所属する藩への忠誠はもつと重大かつ神聖なものであった。

江戸時代における武士の「自律」は、このように、徳川幕府という大枠から強制される服従と、小さいがいつそう重要な統治単位である地元藩から強制される服従によつて、独特の性格と形態を与えられることになった。言葉を変えれば、二種類の「服従」システムの中で、ときにはそれに迎合し、ときにはそれに抵抗しながら、武士たちは、新しい時代に見合った「自律」を形成し、独特の「自律」を生き抜いたのである。

しかし、ひとつ注意しなければならないことがある。二つの「服従」の強制と言ったが、徳川幕藩体制は、つくり上げたばかりの秩序や制度を柔軟性もなく強いることによつて、単に武士たちを型にはめ、飼いならし、都合よく統制したのだ、とみることは必ずしも正しくない。泰平の時代にあつて、幕府も各藩も、なお戦士としての武士にふさわしい剛勇・果斷・仁義・清廉などの徳性や資質、生活態度を尊重したのであり、生涯をつうじてそれらを失わないように訓育し激励したのである。前にも述べたように、山鹿素行に代表される正統的武士道でも、『葉隠』にみられる異端的武士道でも、「死の覚悟」を中軸とした戦士に特有の武士気質は、つねに高く評価され、堅持すべきことが期

待されている。幕藩体制の政治的秩序的のもと、武士たちは、たとえ門地・家柄・所得に大きな高低の差があろうとも、やはり共通して三民（農・工・商）の支配者であったからであり、いざというときには体制の擁護者として武力による規制・抑圧におのれの生死を賭けねばならなかったからである。

一方では、戦闘人としての自律的な意志と言動をけつして失わない、だが他方、すべてを秩序のなかに巻き込んでいく権力・権威にはどうしても服従せざるをえない、この矛盾・相克は、江戸時代に入っついでいっそう深刻かつ尖鋭なものになった。こうした自律と服従の相克が、そしてその相克にたいするいろいろな解決の姿が、『葉隠』のなかにも明瞭に浮かび出ている。同時にそこには、前の時代以上に、武士の価値観の葛藤が、武士の精神的苦悩が、錯綜したかたちで表現されることにもなったのである。

二 『葉隠』にみられる「自律」の諸様相

(一) 死生観における自律

先にとりあげた『葉隠』における「死への覚悟」の箇所でも述べたように、山本常朝にとって本来の武士とは、日常的に死と向き合い、たえず死と対峙する者のことであった。彼の言葉でいえば、「常住討死の仕組に打ちまはり、篤と死身になり切つて、奉公も勤め、武篇も仕り候」（聞書一・六三）者、「武勇に大高慢をなし、死狂ひの覚悟が肝要」（聞書二・三九）だと解する者なのである。

もちろん生きることを単純に否定しているわけではない。だが、「生きる」ことを「死ぬ」とこと切り離して独自に考えることを拒否するのである。戦闘者であることが武士の本質でありつづけるならば、生より先に死を考えるべきであり、生死の選択を迫られた場合は、死の優位をこそ積極的に肯定すべきなのである。次の言葉は、武士の覚悟

の最も純粹無雜といつてよい表現である。

「必死の観念、一日仕切りなるべし。毎朝身心をしづめ、弓、鉄砲、鎗、太刀先にて、すたすたになり、大浪に打ち取られ、大火の中に飛び入り、雷電に打ちひしがれ、大地震にてゆりこまれ、数千丈のほきに飛び込み、病死、頓死等の死期の心を観念し、朝毎に懈怠なく死して置くべし。」（聞書十一・一三四）¹ 「必死の観念は、一日ごとに明確にしておくべきだ。毎朝、身も心も鎮めてのち、弓・鉄砲・槍・太刀によつてすたすたにされ、大浪に呑みこまれ、大火の中に飛びこみ、雷電に打ちひしがれ、大地震に揺り動かされ、数千丈の断崖から飛びおり、病死し頓死するなど、行き着く最期の心に思いをはせ、朝ごとに怠りなく死んでおくべきなのである。」

戦場にあつては、死を恐れず、討ち死にを予期して果敢に敵と斬り結ぶこと、平時にあつても、いつなんどき襲われるかもしれない洪水・地震・大火などの災害、さまざまな事故や疫病による生命の喪失、これらの運命を前もって受容・覚悟しておくこと、これは、武士のうちにも最も鋭く現われた人生態度であつた。もつとも、このことを常朝はとりたてて「自律」と呼んだわけではないが、私は、死生観における武士特有の自律性とみなしてよい、と考える。戦時および平時のこうした緊張感あふれる覚悟なしには、真の武士たりえない、という認識が『葉隠』の根底に流れているからである。

しかしそれにしても、常朝は、なぜこれほどまで死にこだわつたのか、なぜ不条理なほど死を称揚したのか。こういう疑問が生まれてくる。

¹ 『葉隠（下）』和辻哲郎・古川哲史校訂（岩波文庫）二〇七頁／現代訳については、今回も奈良本辰也訳や相良亨訳を参照しつつ、最終的には私の判断と責任で訳出した。なお、私が現代訳を重視するのは、読者の原文理解を容易にするという理由からだけでなく、現代訳の中身のうちに『葉隠』解釈の真価や理解の深淺が投影されると考えるからである。

武士はもともと戦場での闘いを生業とする戦士であった。その戦士が長くつづく泰平の世で戦士としての本質をますます失っていくことへの絶望・嫌悪が、常朝に強くなっていたことが、その第一の理由である。日常的に死と向き合う事態がきわめて少なくなっている当時、彼が武士の本来的使命を訴え、死への覚悟を若い世代に語り伝えようとした必然的な理由はたしかにあった。

さらに次のような理由が挙げられるのではないか。

誤解をおそれずに言えば、泰平の世になって武士が武士としての自律を發揮するには、もはや死しか残されてはいなかった、という事情である。幕府内や各藩内で整備された官僚制のもと、武士たちがその秩序に完全に組み込まれ、文官としての業務・役割に満足してしまうならば、その狭い範囲の中で限られた自律性を実現することはできる。むしろ、あくまで文官としての自律である。だが、そこでは戦士としての武士の自律がまったく問題にならない。

武力による闘いを重視する武士たちにとって、闘いの一結果である死のもつ意義を忘却することは許されなかった。死は、闘う武士の強さや誇りの証であった。島原の乱以降、国内に大規模な内乱がなくなるとはいえ、農民・下民による一揆・強訴、武士どうしの刃傷沙汰や武力衝突、敵討ちなど、世間では暴力をとまなうさまざまな事件にと欠かなかった。こうした事件では、もちろん戦闘者、武力行使者としての武士に大きな役割が期待された。鎮圧や調停のために、渦中の武士たちは、死と向かい合わねばならなかった。

そうでない場合もある。藩勤めの武士がなんらかの重大な過ちや不祥事を犯した場合、また忠心からの諫言が（予想どおりか、予想に反してか）主君の怒りを買った場合、当局からしばしば切腹の処断が下された。これには、罪を犯した当の武士への報復という意味があったが、それ以上に、自死によって責任をとりたいたい、あるいは恥を雪ぎた

いという武士の願いに応えた、という意味もある。

『葉隠』中で語られる「図にはづれて死にたらば、犬死気違なり。恥にはならず。これが武道に丈夫なり。」（聞書一・二二）²「当てがはずれて死んだとすれば、たしかに犬死にであり気違い沙汰であろう。だが、恥にはならない。これが武士道では最も大事なことだ。」³「奉公人の打留めは浪人切腹に極たりと、兼て覚悟すべきなり。」（聞書一・九二）³「真の奉公人の行き着く先は、浪人になるか切腹するかである、と予め覚悟しておくべきだ。」等々の言葉は、恥辱を最も嫌う武士だからこそ、恥よりも死を選択するということの妥当性を言い表わしており、日常において、さらに生涯にわたって、戦闘者としての武士の誇りと名誉を守ろうとする態度を言い表わしている。

その意味で、戦士たらんとする武士には、自律的な意志を貫くためには、戦時では討死が、平時では切腹だけが残されたのである。自死行為は、最も直截にかつ端的に、当該の武士の思いを表現する。ときには深甚な責任感の表出であり、ときには誇り高き名譽心の擁護であり、まれには心底からの抗議の表明であった。それは、あれこれの弁明ではとって代わりえないほどに、当人の願いや意図を強く深く周囲に伝達する方法なのである。常朝は、このことをよく知っていた。彼の主張は、直情的な言動の勧めに満ちあふれており、いかにも「死にたがり」の精神の持ち主であるかのごとく誤解されやすい。だが、平時においても武士らしさを貫くためには、死を前提にした不断の覚悟が不可欠であること、その根本的な覚悟があつてこそ武士の自律が確保できることを、彼は認識していた。そして、常朝にとってそれは、戦士としての武士が平時において向かうことのできる矛盾の解決形態だった、と私は考えている。

2 『葉隠（上）』一三三頁

3 『葉隠（上）』五九頁

とはいうものの、山本常朝自身は、十七世紀後半から十八世紀前半を生きた武士であり、特筆すべき戦闘経験もない。主君光茂の死去ともなつて四一歳で引退し隠棲するまでは、御側役や御歌書役を務めつづけた武士であつた。この点に注目して、側奉公の武士であつた常朝の思想を武士の典型的なものとして扱うのはどうか、彼の叙述のなかに明瞭に表われている、思考停止して「死方に片付く」姿勢、主君への没我的奉公への勧めは、戦国時代の武士と比べて著しく主体性を欠いている、『葉隠』は処世術の書であり、傍観者の無責任な「ただのことば」の書ではないか、との批判がある。

常朝の思想にはたしかに側奉公の武士にありがちな狭い処世観や偏りのある臆見がにじみ出ており、明らかに武士の典型的な思想とはいえないであろう。そして主君への没我的奉公の勧めは戦国武士よりはるかに非主体的だ、という批判は当たっていると思われる。しかし、常朝の思想・価値観と戦国武士のそれとが全く断絶し、常朝が後者の思想になんらの共感を示していない、と捉えるのであれば、それは一面的であろう。戦国武士のさまざまな言動や人生観、剛胆かつ勇猛な武士の代名詞である「曲者」への共感がくり返し語られており、それらは『葉隠』の骨格をなしている。

また、たしかに『葉隠』には処世訓が多い。だが、文官の処世術だけでなく、それに劣らず戦士の処世術に関する陳述に満ちており、泰平の世にあつて、なお「死狂い」の行動がどういう場面でのどのような可能であるかについて、常朝は、時と場所をこえ、さまざまな事例をあげて語り尽くそうとしている。常朝自身は上記の批判にあるように、たしかに文官の域を出なかったが、だからといって単純に文官的武士の生活や価値観を肯定したのではなかった。むしろ、戦士の武士としての振る舞いがきわめて困難になっている世の中で、なお戦士の武士

でありつづけることの意義と価値を説いた、というのが公正な解釈だと私は考えている。

(二) 日常における自律、人生を通しての自律

武士が実現すべき自律性は、「死の覚悟」を第一の根本態度としつつ、自らの日常生活において、さらに人生全体をつうじて、たえず發揮されるものでなければならぬ。根本的な死生観だけあつて、それが日々の語らい、振る舞い、人間関係の中に貫かれていなければ、なんの意味もない。日常や人生過程のうちに現象しないような「死の覚悟」は、空虚であり偽りでしかないからである。

日常生活にあつて予期せぬ喧嘩や敵討ちが出来たらならば、まず「後れをとらない」ことが、最も厳しく武士に求められる。

「何某、喧嘩打返しをせぬ故恥になりたり。打返しの仕様は踏みかけて切り殺さるる迄なり。これにて恥にならざるなり。」(聞書一・五五)。「ある者は、喧嘩の仕返しをしなかつたために、周囲から武士の恥だと言われた。報復のしかたは、まっすぐに踏みこんで斬り殺されるまでである。こうしてこそ恥にはならない。」

「我が身にかかりたる重きことは、一分の分別にて地盤をすえ、無二無三に踏み破りて、仕てのかねば、埒明かぬものなり。(中略)兎角気違ひと極めて、身を捨つるに片付ければ済むなり。」(聞書一・一九四)。「わが身にふりかかった重大事は、自らの瞬時の判断で腹をかため、がむしやらに突き進んでやりとげなければ、決着がつかないものだ。(中略)とにかく気違いになりきつて、生命を捨てると決意すれば事は済むのである。」

前にも述べたが、自分への暴力や暴言を放置することは、武士の誇

5 『葉隠(上)』四五頁

6 『葉隠(上)』八五頁

4 山本博文『葉隠』の武士道』(PHP新書)一九九一—一九三頁参照。

りに無関心であること、名誉毀損をひたすら受忍することであった。そういう事態に直面したとき、即座に反応し、報復しなければならぬ。「恥を雪ぐ」ことであり、受けた恥辱を残さないことである。常朝は、ここでも戦士的武士の果敢な決断を推奨するのである。尤も、こうした直情的で短気な対応が、ほんとうに事態を解決したり、すぐれた人間関係を築くことができたのかは、はなはだ疑わしい。じっさい、これらを契機に、より凄惨な血みどろの武力衝突が、より激烈な報復合戦の泥沼化が招来されたことを、われわれは想起すべきであろう。皮肉にも、当初の「自律」的対応が、本人の予想を裏切って、他者によって憎悪されたり傷つけられたりする、さらには当人の自律的存続すら抹殺される、という「他律」そのものと呼ぶべき悲劇的事態に転化したのである。

死を恐れぬ戦士的武士の価値観は、どんな時でもどんな所でも、臆病を嫌悪し、弱音を吐かない態度にすらなる。

「武士は萬事に心を付け、少しにてもおくれになる事を嫌ふべきなり。就中物言ひに不吟味なれば、「我は臆病なり、その時は逃げ申すべし、おそろしき、痛い。」などといふことあり。されにも、たはぶれにも、寝言にも、たは言にも、いふまじき詞なり。心ある者の聞いては、心の奥おしはかるものなり。兼て吟味して置くべき事なり。」(聞書一・一一八)「武士は万事に留意し、少しでも人に後れをとることを嫌悪すべきだ。とりわけ、ものの言い方に注意しなければ、「自分分は臆病だ」「そのときは逃げることにする」「恐ろしい」「痛い」などと言ってしまうことがある。冗談にも、戯れにも、寝言にも、たわごとも、口にしてはならぬ言葉である。心ある人が聞けば、当人の心の奥底を見透かしてしまうものだ。前もって十分注意しておくべきことである。」

7 『葉隠(上)』六六頁

『葉隠』における武士の「自律」と「服従」

このように、「臆病」「逃げる」「恐ろしい」「痛い」などの言葉は、とことん日常でタブー視された。身が危険に陥ったとき、これらの言葉や感情は、たとえ勇猛な武士であろうと不可避的に生じたであろうが、こうした「本音」を「建て前」で隠すことがむしろ美徳だったのである。弱さを表わす本音は、武士の自律に反するもの、自律を崩すものと捉えられていたことがわかる。

弱音を吐かない、建前によって本心を隠蔽する、といった典型的な武士の生き方を、なんと偽りに満ちた、窮屈な生き方であろう、と評することはたしかに当たっている。自己の内的な心情を率直に表現できぬ存在とは、客観的にみれば、自律的とはとてもいえない哀れな存在ではないか、との批判も可能であろう。だが、江戸期に入っても、戦闘を生業とする武士の特性(たとえば剛勇・屈強・堅忍など)に大きな価値がおかれ、たえずその重要性が説かれつづけたことが、その現実的な要因であった。当時の文化や習俗、さらには教育をつうじて、武士自身も幼少期から、自覚的にそういう価値規範を内面化し、その種の道徳的人格へと自己を形成・陶冶しつづけた。それゆえ、その価値規範の下で自らの人格をひとたび形成した武士たちにとって、弱音を吐くとか、本音を語ることは、かえって彼らには耐えがたい苦痛であり、名誉や誇りの重大な毀損を意味したのである。それを度外視して、彼らの建前的な言動に、偽りだ、偏狭だ、哀れだと非難を投げかけても、彼らはただ嘲笑するのみであろう。

『葉隠』には、以上のような戦士的武士特有の、ときには直情的で攻撃的な行為の勧め、ときには不条理で建前的な言辞の勧めしか存在しないかというところ、そうではない。書中に散在する処世訓には、意外なように思われるが、直情性や不条理性とは矛盾する冷静で合理的な内容のものも少なくないのである。

「我が智慧」(いちぶ)分の智慧ばかりにて萬事をなす故、私となり天道に背

き、悪事となるなり。脇より見たる所、きたなく、手よわく、せまく、はたらかざるなり。眞の智慧にかなひがたき時は、智慧ある人に談合するがよし。その人は、我が上にてこれなき故、私なく有体ありての智慧にて了簡りようけんする時、道に叶ふものなり。」(聞書一・五)。「自分の狭小な知恵だけで万事をなさんとするために、私的な行為となり、天の道理にそむき、悪事をなしてしまう。傍から見たとき、そういう知恵は、汚く、弱々しく、狭隘で、よい結果がえられない。眞の知恵に達していないときは、知恵のある人に相談するのがよい。その人は、自分に関係のないことだから、私心なく曇りのない英知で考えるので、その意見は道理にかなったものとなる。」「古人の金言・仕業しわざなどを聞き覚ゆるも、古人の智慧に任せ、私を立てまじき為なり。私の情識を捨て、古人の金言を頼み、人に談合する時は、逃れなく悪事あるべからず。」(聞書一・六)。「昔の人たちの真なる格言や所業などを聞き覚えておくことも、古人の知恵に学び、私心を生じさせないためだ。私的な感情や知識を捨て、古人の金言を尊重し、他人と相談して事をすすめるときには、誤りもせず悪事もなさないはずである。」

複雑で難しい局面に立たされたとき、個人的な見方や私的な感情に左右されないで、客観的かつ虚心坦懐に思考をめぐらし、できれば経験や判断力の豊かな人物に相談した方がよい、というのである。「我が智慧一分」や「私の情識」の狭さに対する警戒感があり、「有体の智慧にて了簡する」こと、「古人の金言を頼む」こと、「人に談合すること等が、そうした狭さを脱却する重要な方法であることが指摘される。こうしてこそ、天道に一致し、眞の智慧に叶うわけであり、いわば状況への適切な判断や対処を可能にする。合理的な思考にもとづく自律の実現がここにはある、といつてよい。

8 『葉隠(上)』二四頁

9 『葉隠(上)』二四—二五頁

この点においてじつは、儒教的価値を受け入れながら「士道」の本質やあるべき姿を説きつづけた、山鹿素行の論述とかなり重なる部分がある。素行にとつて「義」という価値観は、士道の根本であり、あらゆる武士道倫理はその上にこそ築かれるべきものであった。だが、冷静で合理的な思考と判断なくして、「義」なるこの規範の眞意は理解されえない。また、実践面での「義」の達成も可能ではない。そういう意味では、『葉隠』における「了簡」や「談合」の強調は、常朝の本意ではないとしても、儒教的士道の合理的思考に傾斜していることはまちがいない。

人生全体をつうじての自律的態度の堅持、自律性のたえざる向上も、『葉隠』の強調するところであった。

「或剣術者の老後に申し候は、「一生の間修業に次第があるなり。(中略)この上に、一段立ち越え、道の絶えたる位あるなり。その道に深く入れば、終に果もなき事を見つくる故、これまでと思ふ事ならず。我に不足ある事を実に知りて、一生成就の念これなく、自慢の念もなく、卑下の心もこれなくして果すなり。……」と。」(聞書一・四五)¹¹「ある剣術者が老後に次のように語られた。「一生にわたる修行には順序があるものだ。(中略)いま述べたこの境地(上々の位)のさなる上に、一段とび越えた、ふつうの道の途絶えた境地がある。その道に深くふみ入ると、ついにはどこまでも終わりがなくわかれるので、これで最終だと思ふこともなくなってしまう。自分が不十分であることを深く認識し、一生の間、完成の域に達したという思いをもたず、自慢の念もいだけず、卑下の心もつことなく、進んでいくのみである。……」と。」

「修業に於ては、これまで成就といふ事はなし。成就と思ふ所、そ

10 山鹿素行『山鹿語類 第二』古川黄一編集(図書刊行会)巻第十四、五四頁を参照。

11 『葉隠(上)』四〇—四一頁

の儘道に背くなり。一生の間、不足々々と思ひて、思ひ死するところ、後より見て、成就の人なり。純一無雜に打ち成り、一片になる事は、なかなか、一生になり兼ねべし。」（聞書一・一三九）¹² 「人生の修行過程では、これで成就したということはない。成就したと思つたとき、すでに道に背いてしまつている。一生の間、まだまだ足りない、不十分だ、と思いつづけ、そのように死んだ人こそ、後から見て、たしかに成就した人だったということになる。混じりけない純粹な、一途な境地に達することは、一生かけてもなかなかできることではないのである。」

武士的人格の完成は、容易なことではない。いや、真の自律という境地は、厳密にいえば不可能なのである。いったん達したかにみえない「道の絶えたる位」に入つたら入つたで、そこでも改めて終着点がないことを思い知らされる。人格の完全な成達は達しえぬ目標であり、あるのはただ完成へのたえざる努力であり、努力の過程そのものにほかならない。「一生の間、不足々々と思う」心が、人間の自律を支え、鼓舞しつづける。常朝は、こうした無際限の自己高揚をめざすべき姿勢に、戦士の武士も文官的武士もなら區別があつてはならないとみている。山鹿素行は、社会の支配階層としての武士に、農工商の三民を指導し彼らの模範となるだけの高い道徳性を、そして永続的な人格形成を期待した。¹³ この点では、『葉隠』で描かれる理想的武士も、自分の不足や未熟を真の自律に向かう本源的な駆動力と捉えることによって、素行の理想と共通している。

(三) 自律にともなう立居ふるまい、あるべき風貌

武士の自律は、人生態度や心の内面だけにとどまるものではなかつた。日常の立居ふるまい、語り方、風貌や表情のうちにも現われ出る

12 『葉隠(上)』七二頁

13 前掲『山鹿語類 第二』巻第三十一、三五—三五三頁を参照。

ものであり、その現象をとおして当の武士の本性が、他の人々にもしつかりと感得されるものでなければならなかつた。

物言いについては、基本は「沈黙」「寡黙」であり、言うべきときには、「一言」によつて核心を伝えることである。

「物言ひの肝要は言はざる事なり。言はずして済ますべしと思へば、一言もいはずして済むものなり。言はで叶はざる事を、言葉寡く道理よく聞え候様云ふべきなり。むさと口を利き、恥を顕はし、見限らるる事多きなりと。」（聞書十一・一二五）¹⁴ 「ものの言い方で肝心なことは、言わないことである。言わないですまそうと思えば、一言もいわずにすむものだ。言わなければならぬことは、少ない言葉で道理が立つているように言うべきである。注意せずに口をきいて恥をかき、他人から見限られることが多いものだ、と。」

「武士は当座の一言が大事なり。ただ一言にて武勇顕はるるなり。治世に勇を顕はすは詞なり。乱世にも一言にて剛臆見ゆると見えた。この一言が心の花なり。」（聞書一・一四二）¹⁵ 「武士はその時その場の一言が大事である。ただの一言で武勇が現われるものだ。平和な世で勇気を表現するものは、まさに言葉である。戦の世でも、一言で当の人間が剛勇か臆病かが示されると思われる。この一言こそが心の精華である。」

武士社会では饒舌は嫌われた。瑣末なこと、言う必要のないことを口に出すことは、恥のもとであり、周囲からの軽蔑を招くと考えられたからである。しかし、語る必要があるときに沈黙することは、臆病であり、卑劣であつた。相手に、周りの人々に、共感してもらえよう道理だてて、ことからの趣旨を短い言葉で語ることこそ理想とされていたことが、右記の文からもうかがい知られる。

日ごろの身なり、風貌、表情、立居ふるまいも、武士の自律的本性

14 『葉隠(下)』二〇四頁

15 『葉隠(上)』七二頁

の表われとして重視された。それらは外面だからといって、いい加減にされてはならないものだった。

「打ち見たる所に、その儘、その人々の長分の威が頭はるものなり。引き嗜む所に威あり、調子静かなる所に威あり、詞寡き所に威あり、礼儀深き所に威あり、行儀重き所に威あり、奥歯嚙して眼差尖なる所に威あり。これ皆、外に頭はれたる所なり。畢竟は気をぬかさず、正念なる所が基にて候となり。」(聞書二・八九)¹⁶ 「外から見ただけで直ちに、その人の長所である威厳が現われるものである。嗜みのあるところに威厳があり、静かに落ち着いているところに威厳があり、言葉の少ないところに威厳があり、礼儀の深いところに威厳があり、行儀の重々しいところに威厳があり、奥歯を嚙んで眼差しの鋭いところに威厳がある。これらすべて、外面に現われ出たものだ。結局は気をぬかず、真摯たらんとする心こそがその根本なのである、と言われた。」

「武士の大括の次第を申さば、先づ身命を主人に篤と奉るが根元なり。斯くの如くの上は何事をするぞといへば、内には智仁勇を備ふる事なり。(中略) 外には風体、口上、手跡なり。これは何れも常住の事なれば、常住の稽古にてなる事なり。大意は閑かに強みある様にと心得べし。」(聞書二・七)¹⁷ 「武士のあり方の基本を順に言えば、まず、自分の身命を惜しむことなく主君に捧げることが根本である。このようにした上で何をすべきかと言えば、自らの内面に知・仁・勇の美德を備えることだ。(中略) 外見については、風貌・物の言い方・筆跡が大事だ。これらは日常のことからであるから、日常の稽古によってできるように。なおよその内容は、静かであつて強さが現われているようにと、心得るべきである。」

武士の内面にあるすぐれた人格や特性が一種の威厳となつて外に

表出される必要があつた。逆にいえば、「威」を帯びていない風貌は、内面の貧しき、道徳性や自律性の欠如を意味した。武士にふさわしい智仁勇を内に充実させること、外には静かな落ち着いた起居につとめ、威厳ある眼差しや表情を心がけ、嗜みと重厚さを感じさせる礼儀をふみ行なうこと、この両者はけつして分離されてはならず、表裏一体の關係をなしていなければならなかつた。引用文の最後にあるが、相良亨が注目した「閑かな強み」という規定のうちに、充実した内面的世界から発する武士のあるべき外面的風貌が意味され、その特質が凝縮的に表現されている。

もとより、こうした理想的な風貌は、ふだんの努力なしで簡単に手にはいるものではない。かなり細やかな日常的修業なるものが指示されていることに注目しよう。

「風体の修業は、不斷鏡を見て直したるがよし。(中略) 利発を顔に出し候者は、諸人請け取り申さず候。ゆりすわりて、しかとしたる所のないは、風体宜しからざるなり。うやうやしく、にがみありて、調子静かなるがよし。」(聞書一・一〇八)¹⁹ 「よき風貌のための修行は、たえず鏡を見て容姿を直すのがよい。(中略) 利発さを顔に表わす者は、人々から受け入れられないものだ。どっしりとして確固たるところがなければ、その風貌はよろしくない。恭しく、苦味を感じさせ、立居の静かであるのがよい。」

意外に思われるが、女性のみならず、武士にとつても鏡の大切さが強調される。自分を映し出す鏡を用いて、日々自らの容姿を直すことが推奨されている。身なりや風貌は、他者や周囲の人々との關係で評価されるものであり、「風体」のよしあしは主観的・独善的な判断では決められないことを、常朝は重々知っていたのであろう。ここには、

16 『葉隠(上)』二二頁

17 『葉隠(上)』九三頁

18 相良亨『武士道』(講談社学術文庫)の中の「四、閑かな強み」の章を参照。

19 『葉隠(上)』六三頁

主として文官的武士の処世術が登場しているとも考えられるが、「威」を重視する武士にとつて、その内面も外面もひとしく「閑かな強み」に満たされているべきであり、その意味では、戦士であれ官吏であれ、いつの時代のどんな部署の武士にも要求される嗜みであった。²⁰

自律という生活態度にとつて、人間が本来もっている、あるいは周囲から惹起されるさまざまな欲望を、どう受けとめどのように統御するかは、とくに重大な課題である。欲望に影響され、ときには翻弄されるような意志は、他律的な意志であつて、とても自律とは呼べない意志であろう。武士にあつてもそうであつた。常朝はこの面での警告も忘れなかつた。

「奉公人に疵のつく事一つあり。富貴になりたる事なり。逼迫にさへあれば疵はつかざるなり。」（聞書一・五六）²¹ 「奉公する武士として自分に疵をつけるようなことが一つある。それは裕福になることだ。貧しい生活さえしておれば、疵はつかないのである。」

「三十年以来風規打ち替り、若侍どもの出合ひの咄に、金銀の噂、損徳の考へ、内証事の咄、衣裳の吟味、色慾の雑談ばかりにて、この事なければ一座しまぬ様に相聞え候。是非なき風俗になり行き候（中略）これは世上花麗になり、内証方ばかりを肝要に目つけ候故にてこれあるべく候。我身に似合はざる驕りさへ仕らず候へば、兎も角も相済む物にて候。」（聞書一・六三）²² 「三十年ぐらい前から、世の中の風紀が変化し、若侍たちが寄り集つて語り合う場では、金銀の噂、損得の考へ、内々の暮らし向きの話、衣裳の吟味、色欲にかかわる雑談ばかり

20 山鹿素行の論述でも、武士における内面と外面との一致の強調が顕著であつた。

前掲『山鹿語類 第二』巻第二十一、三七五頁を参照。

21 『葉隠（上）』四六頁

22 『葉隠（上）』五〇—五一頁

がおこなわれ、こういう談義でなければ会合がうまくいかない、と聞いている。まったく情けない風俗になつてしまつた。（中略）これは世情が華美になり、暮らし向きだけが大事だと思つたからこそ、そうなつてしまつたのである。我が身に似つかかわしくない驕つた生活さえしなければ、ともかく問題は起らないものである。」

農本主義を中心とする封建的経済制度では、往々にして単純再生産が基本である。よほどの農業生産性の発展・拡大がなければ、生活水準の向上や家計の富裕化は望めない。右に述べられた「富貴」「金銀」「損得」「衣装」「色欲」などの言葉の登場には、江戸期もかなりすすんで、一定の商品生産や販売・流通、そして貨幣経済の発達があり、それにともなつて庶民生活がしだいに豊かになつたという時代背景がある。

豊かさに甘んじ富貴に流される傾向は武士たちの中にも広がつた。だが、常朝は、風紀の乱れを、とりわけ武士の軟弱化を懸念した。威厳と清廉を旨とすべき武士が、時代の風潮に迎合し、いろいろな欲望に囚われ惑わされることを嫌悪した。武士がよつて立つべき意志の自律を崩壊させるものだ、との認識があつたからであろう。封建社会に特有の節欲主義・禁欲主義の性格が濃厚だつたとはいえ、諸欲求の影響下での他律的な意志決定を斥けて、あくまで主体的に諸欲求を制御し、武士身分にふさわしい自律的な意志決定を貫こうとした姿勢を、ここに見出すことができる。

三 『葉隠』にみられる「服従」の諸様相

（一）主君への奉公

『葉隠』の中で描かれる武士の「服従」は、さまざまな様相・形態をとつている。それらのうち第一義的な服従は、なんといつても「主君への奉公」である。その核心は、すでにかなり詳しく論じたように、武士たちによる主君への自己犠牲的な奉仕、「献身の道徳」にもとづく奉

仕であった。

「我が身を主君に奉り、すみやかに死に切つて幽霊となりて、二六時中主君の御事を歎き、……」（聞書一・三五）²³ 「わが身すべてを主君に差し上げ、できるだけ早く主君のために死んで幽霊になって、いつもいっも主君のことを深く心配し、……」

「無理無体に奉公に好き、無二無三に主人を大切に思へば、それにて済むことなり。これはよき被官なり。」（聞書一・一九六）²⁴ 「むりやりにでも奉公好きになり、ただひたすらに主人を大切に思えば、それでことは済むのだ。これがよい家来なのである。」

おのが主君を思いつづけ慕いつづける心根があるかないかが、良き奉公人であるか悪しき奉公人であるかの分水嶺である。これはもはや理屈の問題ではない。厳しい言い方になるが、常朝は、奴隸根性にも類する「奉公人根性」を前面に押し出してはばからない。まさに奥深い情念のレベルでの君臣間の人間的な絆が重視され、推奨されている。こういう臣下にとって、その行動の原動力は、物でも金でもない。必要に応じて、あるいは偶然に、主君が与える謝辞であり、慰藉の言葉である。

「ただ殿を大切に存じ、何事にもあれ、死狂ひは我一人と内心に覚悟したるまでにて候。（中略）知行御加増、金銀過分に拝領ほど有難き事はなく候へども、それより、ただ御一言が忝かたじけななくて腹を切る志は発るものなり。」（聞書二・六三）²⁵ 「自分はただ殿を大切に思い、なにごとがあるうと、そのとき死に狂いの奉公をするのは自分一人だけだ、と心のうちで覚悟していたまでである。（中略）俸禄を増やしていたり、金銀を過分に与えていただくことほど有り難いことはないけれども、

それにもまして、殿からのただの一言が有り難くて切腹する志も起るものである。」

じつさい、ある機会に主君光茂から下された思いやりの言葉で、常朝自身、主君の死後追い腹することを決意したのであった（尤も、後の殉死禁止令によって、所期の目的を達成することができず、彼は出家・隠棲の道を歩むにとどまったのである）。

主君に仕える武士を、ひたむきな奉公人としてその外部から眺めるならば、ここに独立した自我はない。まさに自己犠牲であり、自我の没却・消失である。客観的には、我を滅した言動だけが浮かびあがる。その点、生死をかけた奉公に見合うだけの恩顧が主君から獲得できない場合、自己利益や報酬を強固に求めた戦国武士たちは、はるかに主體的な存在だといえる。ここに着目して、常朝が理想とする奉公が、自己主張を排斥し、没我的できわめて非主體的だ、という非難はたしかに正当であろう。しかし、他面があることにも留意しなければならぬ。

主情主義的な表現であるとはいえ、きわめて主體的な献身や奉公の意図が、その根底に潜んでいることである。「我は殿の一人被官なり」（聞書二・六一）「我こそは殿さまの唯一の真なる家臣である」という言に明らかなように、自分は他の誰よりも主君を思っている、という強烈な自負心、自分こそ真の臣下に値する、という不動の自尊心があり、他の臣下に対する頑固なほどの自他差別化の意識がある。結果としての没我的忠誠や非主體的奉仕を、むしろ自覚的かつ主體的に選びとっている、というのが真実なのである。それは、封建的秩序が確立し、安定した君臣関係が持続する世において、そうした強固な統治の枠組みの中で生きていかねばならない誇り高き官吏的武士に許された、いわば主體的な決断の結果にほかならなかった。

23 『葉隠（上）』三六頁

24 『葉隠（上）』八六―八七頁

25 『葉隠（上）』一一三―一一四頁

こうした没我的な忠節を主体的に貫きとおすという姿勢は、たとえ主君の命令が誤つていようと、最終的には受忍し実行する、という態度のうちで徹底化されている。

「御主人より御懇ろに召し使はる時する奉公は、奉公にてはなし。御情なく御無理千万なる時する奉公が、奉公にて候。」（聞書九・二四）²⁶ 「主人から信頼や情愛をえて召し使われている時の奉公は、真の奉公ではない。情愛もかけられず理不尽な命令をうけた時おこなう奉公こそ、ほんとうの奉公なのである。」

「我が身は難儀恥辱を堪忍し、主君の恥をあらはさず、主君の用の欠けぬ様にするこそ、忠臣とは云ふべし。何ぞ一身の潔き事を好まぬや。」（聞書十・九）²⁷ 「我が身は難儀や恥辱を堪え忍び、主君の恥を外に漏らさず、主君の用に不足をもたらさぬようにする者こそ、忠臣と云うべきである。どうして自身の潔さだけを求めてよいものか。」

主君による政治支配や命令が十分な合理性をもち、それに共鳴して命令に従うことができる場合は、とくに問題はない。ところが、その命令が不条理で理不尽な場合もありうる。その時どうするか。もちろん、可能なかぎり異議申し立てや諫言の行為もとられるであろう。身分・職位に応じた主君への意見具申を、常朝も否定しない。だが、命令が変更されず、それへの服従が強制されるとき、むしろ積極的に命令の実現のために尽力・奔走すべきことを訴えるのである。

当時、「御情なく御無理千万なる時する奉公」はけっして例外的でなかったのではないかと推測される。どんなに厳しい境遇であれ、その種の奉公ができるかどうか、忠臣かどうかの試金石であった。戦国武士は、おのが自律を守るために、我が意に反する命令をくだす主君から立ち去ることもできた。安定した君臣関係に束縛された

江戸期の武士は、それほど自由ではありえない。とくに『葉隠』武士は、過ちから発生するにちがいない主君の恥を露呈させぬために、我が意に反する主君の命令を雄々しく受容した。だが、それを「面従腹背」というのは妥当ではない。あえて言えば、「面従腹従」であり、自己を「無理無体に」それへと収斂させんとした。まさに「不条理なれども心底から服従す」という姿勢を堅持し發揮することによって、いわば逆説的に自律的であろうとしたのである。

(二)「家」・「藩」への忠誠

主君への献身的奉公とならんで、鍋島家ないし鍋島藩にたいする無条件的な忠節・奉仕も、『葉隠』の著しい特徴である。

「……有難き御国、日本に比類なき御家に、不思議にも生れ出で候事、本望この上なき事に候。（中略）いよいよ私なく御用に相立ち、御情なく御無理の仰せ付け、又は不運にして浪人切腹仰せ付けられ候とも、少しも恨み奉らず、一つの御奉公と存じ、生々世々御家を歎き奉る心入れ、これ御当家侍の本意、覚悟の初門にて候。」（聞書四・八一）²⁸ 「感謝すべき尊いお国、日本の中で比類なく立派なお家に、自分たちが不思議にも生まれ出たことは、本望この上もないことである。（中略）ますます私心なく殿のご用に立ち、無情で不条理な命令、または不運にして浪人や切腹を仰せつけられても、少しも恨み申し上げず、それも一つの奉公だと考え、世がどんなに移り変わろうと、お家のことを深く心配申し上げる心構え、これこそご当家の侍の本意であり、覚悟の基本なのである。」

武士たちを直接帰属させ、生計の糧を与えてくれる本体は、なんといつても藩であった。自分が生まれ育った藩の存続こそは武士身分の保障であり、それゆえ武士たちにとっては「恩顧」の現実形態であった。とはいえ、これは、日本各地のどの藩でも当てはまることである

26 『葉隠（下）』 八七頁

27 『葉隠（下）』 一〇一—一〇二頁

28 『葉隠（上）』 二〇八頁

う。「有難き御国」「日本に比類なき御家」という観念は、佐賀の領国ないし藩、鍋島の家、の武士に限られはしなかつたはずである。しかし、歴代主君の家系と藩のすばらしさや独自性に対する賛美、上からの不条理な命令や処断をも受け入れてしまう自己犠牲的な忠節の追求・称揚は、異常なほどにきわだっている。

「御家中に、よき御被官出来候様に人を仕立て候事、忠節なり。志ある人には指南申すなり。我が持分を人をもて御用に立つるは本望の事なり。」(聞書一・一二五)²⁹「家中に、すぐれたご家臣ができるように育成することは、真の忠節である。志のある人を教え導いてあげようと思う。自分の持っているものを他人のために役立てることができるとは、まさに本望である。」

徳川幕府の存続を願う言葉は、とくに『葉隠』に出てこない。その点、鍋島の家や藩の永続を願う言葉は強烈だ。鍋島家・鍋島藩の永続を願うからこそ、その永続の土台たる真に忠節の家臣を継続的に育成しなければならぬ、という強い使命感が表明されるのである。

藩という組織とその組織への忠誠が『葉隠』のなかで重視されていることに注目し、日本思想史家の池上英子は、『葉隠』の哲学の基調には、「鍋島愛国主義」「鍋島ナシヨナリズム」がある、と主張した。さらにその内実を問うて、『葉隠』の論理は、……忠義の場が主君その人から「藩」という政治組織そのものへと移行したことを反映している³⁰と云う。主君が理想的な為政者ではなく、主君を思う家臣にわたる情緒的な認知を与えぬ場合、家臣がそれでも忠実な奉仕をつづけるためには、主君一身より一段高い価値のあるもの、すなわち主君の「家」を忠義の対象として導入することで(常朝は)この困難を

解決しようとした、というのが彼女の結論であった。³¹これは傾聴すべき解釈であり、検討に値する指摘である。

歴代の主君は、一定の期間、藩の統治や家臣団の統率をおこない、そしてこの世を去っていく。しかもそれぞれは、尊敬に値する名君ばかりではない。各藩主には特有の限界がつきまとう。統治の時間的制限において、統治能力の質や水準において。藩主個人への相対性を超えるもの、その制約性を補完するもの、それは各藩主を生み出す家系であり、藩組織である。常朝が特定の主君になんらかの失望をいだき、限界をもつ主君よりも永続的性格をもつ家や藩に希望を託した、という可能性がたしかなかつたとはいえない。

しかし、『葉隠』にあつては、主君と藩とを分離する認識や表現は萌芽にとどまつた、と私は考える。藩主の限界性と鍋島家・鍋島藩の永続性との差異意識はたしかにあつたであろう。だが、藩主と切り離して鍋島の家や藩の独自性を常朝が意識的に評価・期待し、それを忠義の対象とした、というの的を射ていないと思われる。じつは、それほど『葉隠』における人間的な主従関係は濃密であることを要求されたからであり、主君と臣下との「人格的依存関係」が最初から最後まで重視されたからである。

常朝が主君を飛び越えて藩を忠義の対象としたと理解するには、前節で紹介した主君への滅私奉公、主君と家臣との情緒的な絆の絶対視が必ずしも常朝の本心ではなかつた、あるいは没我的忠節を強調する彼の語りには虚偽があつた、とみなす必要がある。だが、それはかなり牽強附会の解釈だといふべきであろう。『葉隠』にみられる理解では、主君という人格と藩という組織との未分化が顕著であり、藩という政治体はいわば主君という人格の組織的表現の域を出ていないのである。尤も、藩という組織はすでに幕府のもつ官僚制秩序に準じた一種の中

29 『葉隠(一七)』六七頁

30 池上英子『名譽と順応』森本醇訳(NTT出版)二九二頁

31 同右 二九二―二九三頁を参照。

中央集権的制度をそなえており、現実には、主君の人格とけっして同等の機能ではありえず、その性格も異質なものになりつつあった。だが、おそらくそのことを予感しつつ、それでもなお常朝は、人間的情愛を基本にした主従関係や藩内政治を希求し、またその復活を訴えつつけたのだ、と考えられる。

(三) 一生の奉仕、主体的・意志的な服従

常朝にとって、主君への奉仕・忠節は一生をかけた行為でなければならぬ。主従の関係がいったん成立した場合には、それを維持し、より堅固にすべきなのである。臣下は、むしろ現実からいって簡単に主君から立ち去ることはできなかったし、また道義からいって立ち去るべきではなかった。この点にかかわって、次のようなエピソードが『葉隠』で紹介されている。

相良求馬が家老職に就いたとき、鍋島平左衛門の家臣であった有能な士である高瀬治部左衛門をせひ自分の家来にしたいと申し出、彼を譲りうけることを主人の平左衛門に承諾してもらうことになった。ところが、当の治部左衛門は、求馬を前にして、生活は豊かになるかもしれないが、貧しい生活のほうがずっと気楽だと言ひ、「奉公人は主人を持ち替へ申さぬものにて御座候」（聞書九・一八）と断った、という。³²

常朝は、相良求馬がそれを聞いて感心したことを語り、一生主人を替えぬ武士の姿勢のうちに、臣下としての高い不動の道義性をみている。ただし、この逸話を聞くかぎり、すぐれた家臣を他家に譲ったり、他家から譲り受けたりすることが、武家社会で現実におこなわれていたことが知られる。治部左衛門の場合、むしろ例外的な行動だったかもしれない。しかし、「主人を替えぬ」ことに高い価値が与えられて

32 『葉隠（下）』八四―八五頁

いたこと、それを理想的な臣下気質とみなす風潮がなお根強かったことは承認されてよいだろう。

奉公は、ひとたび決まった主人を一生替えないという堅固な節操であるとともに、一生をつうじて主を思い、主に忠誠を尽くしつつける絶大な忍耐を意味していた。

「御心入を直し、御国家を堅め申すが大忠節なり。一番乗り、一番鍵などは命を捨ててかかるまでなり。その場ばかりの仕事なり。御心入を直し候事は、命を捨てても成らず、一生骨を折る事なり。」（聞書十一・二八）³³ 「殿のお心やお考えを直し、お国を堅固なものにすることが、大忠節である。戦場での一番乗りや一番槍などは命を捨ててかかればよいものだ。その場だけの仕事である。しかし、殿のお心やお考えを直すことは、命を捨てても成功せず、一生骨を折らねばならない仕事なのである。」

戦場での一番乗り・一番槍を達した武士は、たしかに勇猛果敢さにおいて、その戦果において、輝かしい忠節の模範である。だが、生命を賭した激烈な働きぶりとはいえ、それはやはり一時的な忠節の発現にほかならない。これに比して、主君の傍らで、主君を助け、主君の言動を支え、ときには諫言する仕事は、短期間ではすまない、忍耐を要する一生の忠節の發揮である。常朝は、戦士の武士より文官的武士の苦勞の長さ・大きさに言及し、それに高い価値を与えている。ここには、はしくも、文官でありつづけた常朝の意地と誇りが垣間見られる。それは同時に、戦士の武士の気質に憧れながらも、もはや戦士の武士とはなりえない江戸期の武士がおこなった、人生目的の再設定と新しい名譽心の内面化だったのである。

奉公は、たしかに生涯をかけた献身的な服従であった。タテの身分関係のもと、しばしば自らの意に沿わぬ、ときには意に反した上司

33 『葉隠（下）』一七五頁

の命令にたいする、苦しみ多き服従であった。だが、自分が気に入らないからといって、命じられた役目をことわって引退してしまうような家臣にたいし、常朝は厳しい非難をあげている。

「不気味なる事ありとて、役断り、引き取りなどする事は、御譜代相伝（まごついで）の身として、主君を後に（あと）にし、逆心同然なり。……仰せ付けとさへあらば、理非にかまはず畏まり、さて氣に叶はざる事は、いつまでもいつまでも訴訟をすべし。」（聞書一・一五八）³⁴ 「自分の気に入らないことがあるからといって、依頼された役目を断わり、引退などすることは、代々お家に仕えてきた家臣として、主君を後に回し、反逆するも同然の行ないである。……殿からの仰せつけであれば、正しくとも正しくなくともまずお受け申しあげ、その後考えの異なることについては、いつまでも申し上げつづけるべきである。」

まずは理屈ぬきに任務を引き受け、そのあと気にいらぬことを自分の意にかなうまでいつまでも申し出るべきだ、というのである。服従は服従であるが、自分の意志をまったく滅却しての服従ではない。「理非にかまわず」引き受けるさいにも、確たる意志が示され、自分の考えをその後実現しようと努める態度にも、強い意志が発揮される。自己なき服従、意志なき迎合ではないことがわかる。もちろん、そういう努力が報われなかったことも少なくない。しかし、こうした奉公のプロセス全体をとおして、服従じたいが主体的・意志的服従の性格を濃厚に帯びるようになったことは否定できないであろう。

服従の主体的性格とあわせて、さらに一定の知的理性的性格が求められていたことにも留意しよう。

「時代の風俗、主君の好嫌（すよあきら）をも合点なく、無分別に奉公（ひょうこう）に乘気（りやうき）などさし候はば、御用にも立たず、身を亡ぼし候事これあるべく候。」（聞

書二・八）³⁵ 「その時代の習慣・風紀や主君の好き嫌いを理解せず、分別なくただ精力的に奉公しようとするならば、殿の御用には立たず、我が身を滅ぼしてしまふこともあるものだ。」

すなわち、常朝は、世間や時代状況についての認識、主君が望むもの・望まないものについての理解が、効果的な奉仕にとって不可欠だとみている。ここにあるのは、情緒的盲目的奉仕ではない。自らの忠誠が忠誠として実を結びうるための、賢明な良識・判断が必要であることの主張である。一方で、一見盲目的で直情的な「無二無三」の忠節をうたいながら、他方で、その忠節実行にあたって、時代や体制秩序に関するかなり理知的な洞察を強調する、というこの矛盾も、これまで無視されがちであった『葉隠』の特質なのである。

このように、一部に冷静な知的判断をふくむ意志的な服従が目ざされたのであるが、同時にそこには、身分や職位によって異なる奉公のあり方・心の用い方が、十分認識され遂行されなければならない、という重大な制約があった。

「萬事、実一つにて仕て行けば済むものなり。その中に奉公人は御側・外様・大身・小身・古家・取立などについて、それぞれ少しづつの心入れは替るべし。御前（ごぜん）近き奉公などは、差し出でたること第一（だい）わろきなり。大人（おとな）の御嫌（ごきら）ひ候ものなり。」（聞書二・三〇）³⁶ 「万事、一途な誠実さでもって進んでいけば、それで済むものだ。奉公人としては、お側・外様、大身・小身、古参・新規取り立てなど、各々の身分で少しづつその心構えは変わることであろう。殿のお側近くでの奉公などは、差し出がましいことが最も悪い。主君がお嫌いになることである。」

主君の御側にある者だからといって、無遠慮で差し出がましい態

34 『葉隠（上）』七五―七六頁

35 『葉隠（上）』九三頁

36 『葉隠（上）』一〇二頁

度は主人の反感を買うもとなる。それぞれの職階にふさわしい意思の伝え方、意見具申や忠言がもとめられた。「諫言」を論じた箇所です。すでに詳しく述べたように、直接の助言・忠告のたぐいは家老職にかざられていたし、その地位に達してもいない者がそうした言動をとることは、明らかに不忠であった。主君への奉公を希望し念願する誰もが、身分を超えて、いつでも公平平等に忠節を尽くすことができたわけではない。あくまで職位や立場に限界づけられた奉公であった。封建的身分制社会だからこそそんなことはしごく当然だ、との受けとめ方もたしかにありえよう。しかし、家老になりえなかった常朝自身が味わったように、奉公一途をめざそうとも、現実にはその思いをはたせなかつた大半の家臣の悔しさ・無念さが、君臣関係の背後に営々と積みあげられていた事実を、われわれは見落とすことはできないのである。

『葉隠』は「死の覚悟」を土台とした熱情的な武士道の書だ、と言われてきた。理屈にとられない純粹な武士道精神の表われをその中にとらえることは、まちがいではない。だが、これまで見てきたように、それは同時に、対立する資質、性向、理念を併存させた記述であり、それらの混合体としての書である。すなわち、戦士の武士と文官的武士という資質の対立、直情的猛進的性向と知的合理的性向との対立、そして独立的武士の「自律」の理念と秩序内の臣下の「服従」の理念との対立などが、その内実をなしている。『葉隠』の記述や常朝の訴えの中に、もっぱら純粹さ・真正さを見るよりも、むしろ各所にじみ出ている葛藤や錯綜、対立や矛盾をとらえる方が、この書の真意に迫ることができるだろう。

より踏み込んで言えば、文官的武士の立場に立ちながら、戦士的武士の資質にあこがれ、それに固執しようとする矛盾、直情的猛進的な

性向をさかんに称揚しながら、泰平の世では知的合理的な性向をないがしろにはできず、それを受け入れようとする矛盾、自尊と誇りを守って自律的であろうとしながら、官僚制的秩序のもとでの服従を意志的に耐え忍ぼうとする矛盾、まさにこれらの矛盾を『葉隠』武士道は免れることができなかったし、武士たちもこれらの矛盾のただ中で生き抜かなければならなかった。それゆえ、この書のなかで取り上げられた多くの武士たちの姿は、私の思うに、時代の過渡期に生じた避けがたい苦悩を背負い、自分の生死にかかわる選択や行動をおし、苛烈な矛盾の解決のさまざまなバリエーションを示した姿だったのである。

